

---



---

**特集 日台ムササビ会議記録**


---



---

## 「日台合同リス・ムササビ類学術交流会議」 開催にあたって

押 田 龍 夫

北海道大学理学部附属動物染色体研究施設

リス科動物に関しては、近年アメリカを中心に、生態・行動についての活発な研究が行われておる、例えはキツネリス *Sciurus niger* 等の特定種に的を絞ったシンポジウムまで開催されている。しかしながら、北米よりも多くの種類のリス科動物が分布しているにもかかわらず、アジアではその研究事例が非常に乏しく、ほとんどの種の生態・行動が不明のままであり、また、分類・系統に関する様々な問題が残されている。こういった状況にあって、アジア諸国のリス類研究者が互いに手を携え、アジア全域を睨んだ広い視野からリス類の研究を行うことは、非常に有意義であり、将来研究を発展させるには必要不可欠であろう。そのためのささやかな最初のステップが‘日台合同リス・ムササビ類学術交流会議’である。本会議は、日本哺乳類学会の後援を得て1998年10月31日に、台湾の台中市にある国立自然科学博物館の講堂で開催された。会議では、13題（日本側からは安藤元一、岡崎弘幸、押田龍夫、川道武男、川道美枝子、柳川久による6題、台湾側からは趙榮台、李培芬、裴家騏、夏良宙、郭奇芊、戴永褪、林良恭による7題）の講演があり、これらは、生態学、行動学、形態学、分類学、系統学、文化人類学、さらに保護保全に至るまで、リス・ムササビ類に関する幅広い分野を網羅していた。講演終了後には、総合討論の時間を十分に設けて、両国間での活発な議論、そして貴重な意見・情報の交換を行うことが出来た。なお、本会議における講演および質疑応答等は、ほとんどが英語で行われた。

さて、会議についての私の印象・感想等々をここで簡単に述べたい。

成田空港から飛行機で僅か3～4時間という近い場所にありながら、台湾には日本産のリス科動物と同種のものは分布しない。帰化動物種を除いて、現在、日本と台湾には、各々6種のリス類が分布しているが（表1・2）、両者を比較すると、共通の属はムササビ属 *Petaurista* のみである。必然的にムササビ属は、両国間で議論をする際の共通の話題として取り上げられ、また、講演内容自体もムササビ属に関するものが半数以上を占めていた（このため本特集記事においては、実際の講演順序にかかわらず、まずメインテーマとして、ムササビ属を中心とした滑空性リス類に関する演題を取りまとめ、続いてその他の非滑空性リス類についての研究・事例報告等を一括して扱った）。台湾の自然環境・地史的な背景は、日本列島とは様々な点で異なっており、その結果が両国間におけるリス科動物の分布の違いに反映されていると思われる。日本のものとは全く異なるリス・ムササビ類の研究に関する様々な話題は非常に新鮮かつ興味深いものであった。また同時に、日本で行っている調査方法をそのまま応用出来そうな種、あるいは今後日本産のものと比較研究を行うと面白そうな種なども認められ、日本側参加者の方々は研究上の多くのヒントを得ることが出来たのではないだろうか。

表1. 日本に分布するリス科動物.

和 名	学 名	中 国 名	中 国 名
ムササビ（ホオジロムササビ）	<i>Petaurista leucogenys</i>	日本鼯鼠	日本鼯鼠
ニホンモモンガ	<i>Pteromys momonga</i>	日本小鼯鼠	日本小鼯鼠
タイリクモモンガ（エゾモモンガ）	<i>Pteromys volans</i>	歐亞大陸小鼯鼠	歐亞大陸小鼯鼠
ニホンリス	<i>Sciurus lis</i>	日本松鼠	日本松鼠
キタリス（エゾリス）	<i>Sciurus vulgaris</i>	歐亞紅松鼠	歐亞紅松鼠
シマリス（エゾシマリス）	<i>Tamias sibiricus</i>	西伯利亞花松鼠	西伯利亞花松鼠

表2. 台湾に分布するリス科動物.

和 名	学 名	中 国 名	形 态 的 特 徵
オオアカムササビ <sup>注1)</sup>	<i>Petaurista petaurista</i>	大赤鼯鼠	背部は暗赤色, 胸腹部は黄褐色を帯びる.
カオジロムササビ	<i>Petaurista alboryctus</i>	白面鼯鼠	背部は暗赤色, 胸腹部は白色～淡黄色である.
ケアンモモンガ	<i>Belomys pearsonii</i>	台灣小鼯鼠	背部は茶褐色, 胸腹部は白色を呈し, 手足(特に足の甲の部分)が短毛で覆われている.
タイワンリス <sup>注2)</sup>	<i>Callosciurus erythraeus</i>	赤腹松鼠	背部は暗灰色で, 胸腹部の色は灰色または暗赤色を呈するが, 暗赤色の占める面積に地域変異がある(林良恭・陳彦君による本特集記事参照).
オーストンカオナガリス	<i>Dremomys pernyi</i>	長吻松鼠	背部は暗灰色, 胸腹部は黄褐色を帯び, 物語が長い.
タイワンホオジロシマリス	<i>Tamiosops maritimus</i>	台灣條紋松鼠	背部に3本の黒色の縦模様を持ち, 外觀はシマリス <i>Tamias</i> に類似している.

注1) 台湾のオオアカムササビは、近年、インドムササビ *Petaurista philippensis* の一亜種として分類されているが、ここでは馴染みの深い旧分類体系を採用した。特集記事の中では、必要に応じてインドムササビの名称を用いている論文もあるが、この場合は、文章中に注釈が施されている。

注2) *Callosciurus erythraeus* に相当する和名はクリハラリスが妥当であるが、台湾産の本種は慣用的にタイワンリスと呼称されているため、本特集記事では和名をタイワンリスに統一した。タイワンリスという和名は、本来は *Callosciurus caniceps* に対して使用されているものであり、今後、クリハラリス・タイワンリスという和名の定義を明確にする必要がある。

ところで、会議を通して私が最も強く感じたことは、リス類についての両国間での認識のズレである。日本側研究者がリス類を生物学的な研究対象としてのみ捉えているのに対して、台湾側研究者の半数以上の方は、これらを植林に被害を与える厄介な害獣であると見なしており、そのための対策が一番の興味・研究テーマとなっているのである。日本においても、かつてムササビが植林に被害を与える害獣としてクローズアップされたことがあるが、台湾の比ではない。したがって、純粋な生物学的見地から、まだまだ台湾のリス類には未知の部分が残されており、今後の非常に興味深い研究対象であると言えよう。

もう一つ会議の場において感じたことは、台湾の若手研究者、あるいは学生・院生の方々の熱気である。今回の参加者総数は150名であったが（この参加人数は台湾の生物系シンポジウムでは過去最大規模のものだそうである）、その多くを占めていたのは台湾の若い方々であった。今後の台湾の哺乳類学がこういった若い方々によって着実に担われ、さらに大きく発展することを心より願いたい。

会議が終了した後、台湾中部の渓頭にある国立台湾大学演習林まで移動し、一晩のみではあるが、日台合同のムササビ観察会を行った（この観察会にも80名もの台湾の学生・院生の方々が集まつた）。この日は残念なことにムササビの姿を確認することは出来なかつたが、かわりに、滅多に観ることの出来ないケアンモモンガ *Belomys pearsonii* を観察することが出来た。この後さらに二晩、日本側のメンバーのみでムササビの調査を続け、オオアカムササビ *Petaurista petaurista* の姿を何度も観察することが出来た。

今回の会議、そして観察会・野外調査を通して得られた学術的な収穫は、日本・台湾両国にとって非常に大きなものであったと思う。そしてこれを一つの機会として、今後は日本と台湾のみにとどまらず、アジアの多くの国々をも含めたリス・ムササビ類研究に関する学術交流を展開することが出来ればと願う次第である。

最後にこの場をお借りして、本会議の開催に当り御尽力頂いた台湾側事務局の林良恭博士（台湾東海大学生物学系副教授）と李玲玲博士（国立台湾大学動物学系副教授）、特別に本会議に御参加頂いた郭宝章博士（元国立台湾大学森林学系教授）、さらに、予算面で全面的な御援助を賜わった台湾行政院農業委員会、そして会議の会場を御提供頂いた台中市国立自然科学博物館の方々へ深く感謝の意を表したい。また、台湾の方々の原稿を翻訳する際に貴重なコメントを頂いた阿部永博士（元北海道大学農学部教授）に厚く御礼申し上げたい。

---

Tatsuo Oshida: Organizing the Japan-Taiwan scientific symposium 1998 on squirrels and flying squirrels.

著者：押田龍夫，〒060-0810 札幌市北区北10西8 北海道大学理学部附属動物染色体研究施設